

F 3 家庭科教育食物領域の学習指導に関する研究 (その2)

—女子短大生の基礎的知識の理解度について—

聖霊女短大 ○出雲悦子 山田節子 茨城女短大 松永暁子

目的 適切な食生活が、成人病の予防、健康な身体づくりのみならず、子供の人格形成にも大きくかかわりがあると言われている現在、食物教育のあり方を検討することは、特に重要であると思われる。そこで、将来母親となり子供を育てていく若い女性を教育する女子短大において、今後の指導に役立てたいと考え、まず、入学した学生が、高等学校までに学んだ食物領域の内容を、どの程度正しく理解しているのか、更に短大で学んだ食物に関する知識がどの程度身についたか、また、実際の家庭生活に、いかに応用しているかを知る目的でこの調査を行った。

方法 女子短大生600名について、入学時に、家庭一般の学習内容より、栄養・献立、食品、調理の各分野にわたって問題を作成して解答させた。なお一部の学生には、家庭科技術検定食物4級を用いて技術の定着度をも合わせ調べた。また一部には、2年次にも同じ問題を配布して解答させ考察を行った。更に、家庭生活に応用しているか否かは、アンケート用紙に、その場で記入させて回収した。

結果 入学時には、高等学校で家庭一般のみ勉強した学生に比べ、食物Ⅱまで学んだ者の方が得点が高く、特に栄養価計算において差が著しい。知識の得点と技術の得点には相関があり、知識の得点に影響する因子は、技術の計量と調味がもっとも強かった。家庭での食事づくりの参加程度は、ほとんど毎日が16%、時々が74%であり、ほとんど作らないは10%であった。家庭で作る料理の習得先は、本やテレビが第1位で45%、母・姉が33%、学校が31%であった。